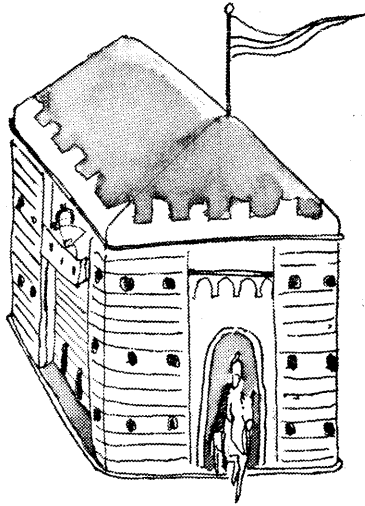


四隅を結ぶ描画の世界



津
守
真

子どもの行為を、単に客観的に対象化して見るのではなく、その子どもとした行為として見ると、その子どもにとっての意味が見えてくる。それが私がしたことに対する子ども
の応答である場合もあり、また、子ども自身の内側から自発的に生れた子どもの世界の表

現である場合もある。この後者があらわれるのには、保育の場においては、少くとも、大人と子どもとの間で、安心して快く過せる関係がつけられていることを要する。そうではないときには、子どもは大人への反逆として行為し、あるいは、大人との関係を修復しようとして行為する。具体的な生活基盤がととのったときに、子どもの本来の世界（個性や本質）が遊びや作品に自発的に表現されるに至るのである。今回はこのような過程をへて生れたひとつの描画について考えてみたい。

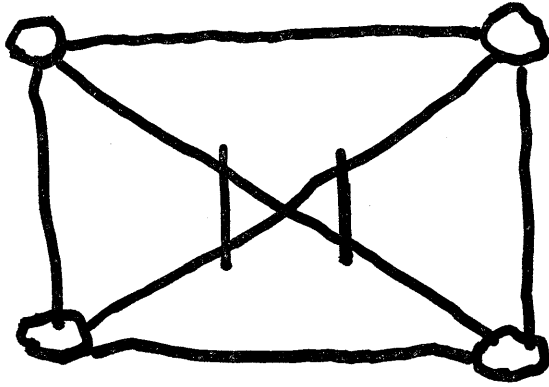
三月のはじめ、Sが、朝、登園してくるところに私は出会った。このごろ、私はSと疎遠であると思っていたので、できるだけSと過したいと思っていた。しかし、Sは私の傍をすり抜けて、部屋にはいってしまった。しばらくして庭に出てきたSは、私の手をひいて裏庭のブランコにゆき、ブランコにおなかをつけて、何度もこいでゆらした。私はあまり手を出さずに、歌を口ずさみつつ傍にいた。このブランコぎは、Sの内的表現であると共に、私と一緒に遊ぼうとする、私との間のできごとである。快くこの時を過せるように私が一緒にいれば、Sの具体的な生活基盤をつくっていることになる。実践の場ではそれ以上考えるには及ばない。Sが揺れるのを一緒にたのしんでいけばよい。

ここまでは、この日のSの生活の前提とも言える部分である。やがて、Sは私との間で、もっと思い切り遊べることができそうだと思ったのである。私の手を引いて、奥の職員室にゆくことを要求した。

一緒に職員室にゆくと、流して洗い桶をひっくり返してから、先生たちの机の上にあった学年末のアルバムを作るためのサインペンの箱をかかえて隣室にいった。

Sは机の上でサインペンを全部出して並べた。Sがこれからどうしようとするのかわからない一抹の不安を感じながら、私は画用紙を机の上に出した。Sはそれには目もくれず、私の眼鏡を出して、何度も私にかけさせる。そんなことをしながら、私はSと笑い合った。

そのとき、ひとりの先生がサインペンを使う必要が生じて、それをとりにきた。するとSはサインペンをしっかりとかかえてはなさ



ない。その先生は、そんなにほしければ持っていていいわよといって立ち去った。そのことばにこそわれたのか、Sは画用紙に人の形を描いた。Sはえのぐを使うのは好きだが、はっきりした人の形を描くのを見たのは私にははじめてであった。

ひとつかき終えると、別のサインペンをとって、同様に何枚か描いた。

傍に坐っていた私は、Sが描き終えたサインペンにキャップでふたをした。私はこれを黙ってそっとやったのだが、すぐにSは、十五本ほどあったサインペンのキャップを全部はずし、そのキャップを手で払って机の下に落した。そして、更に足でキャップを奥にけとばした。ここで、私は、サインペンのキャップをしたことが、Sに警戒心を起させることになったことを悟った。

私は自分の考えに従って行動した。そしてそれに対するSの応答を見た。Sは、私の行為を、制止として意味づけたのである。Sが十五本のキャップを全部はずしたのは、サインペンのふたをしてはいけないという意志表示であり、私に対する反逆でもあった。あるいはまた、全部のサインペンを、自分がいつでも使えるようにしておくためであった。色とりどりのサインペンを、どれでも使って描けるような場をつくった上で、自分の思うものをかきたいのだからと、そのとき私は思った。私のなすべきことは、もっとその場をたのしむようにすることだと、私はもう一度自分の心にいきかせた。画家が作品をつくるときには、自分のまわりに、絵筆を何本も並べているのではないか。私は何と些末なことにとらわれて、大きなことを見落すのだろうか。

それからSは、描くことに本気にエネルギーを向けた。(そのときの描画が写真である。)Sはまず画用紙の四隅に小さな渦巻をかいた。これから何がはじまるのかと、私は軽い興奮を覚えた。それから、Sは、四隅を直線で結び、対角線を引き、その上に垂直線を二本立てた。

ここには何も手本はない。Sは、私との関係の中で、自発的に、心にあるイメージを表現したと考えてよいと思う。Sが本来の自分の世界を表現しようとしたことにおいて意味がある。

Sはさっと立ち上り、私の手をひいて裏庭にゆき、ブランコにおなかをつけてこいだ。身体を地面に平行にしてゆらしている。

ここに描かれた描画が、Sの世界を表現しているとすると、それはどのような世界と考えてよいだろうか。

何週間か以前に、Sは壁にえのぐで大きく垂直線を描き、それに交差する水平線を描き、その上に渦巻きをかいて、最後にはぬりつぶしてしまったことがあった。そのときもそれに先立つ過程があったが、いまは省略しよう。Sは十字の座標軸の上に渦巻を位置づけた。きょう、画用紙の四隅にしっかりとしるしをつけているのは、偶然ではなく、四角

い紙の四つの隅を認識して描いていると考えてよい。四つの隅は、空間をきめる基点である。四隅をもった四角い空間は、安定した内部空間をつくる。われわれの住む家も、部屋も、多くは四角形である。円形の部屋もないではないが、私共は通常四角の部屋の中で、無意識のうちに安定感を得て生活している。角力の土俵には、もと、東西南北の四本柱があった。四が完全数と考えられるのは、四隅によって作られる空間が最も安定感を与えるからであろう。

画洋紙にも四隅がある。四隅を直線で結ぶことにより、内部空間がつくられる。更に二本の対角線を交差させることにより、空間の中心がきめられる。これらの線により、空間の座標軸が意識化される。画面に描かれるものは、その座標軸の上で位置が明瞭になる。Sは、この対角線の上に、中心から対称の位置に、二本の垂直の線をひいた。Sはこれによって直立する人、あるいは自分を描いたのかもしれないし、梁から吊下げられたブランコの綱を描いたのかもしれない。

これはSが自発的に描いた画であり、Sが生きている世界を表現していると考えられる。Sは一見あちこち歩き回る子どもであるが、心の中では基準点の四隅や、安定する空間や座標軸を求め、それを見出そうとしているのではないかと思われる。そのように考えると納得できることもいくつかある。登園すると気に入りの大人をさがす。二階の隅や裏庭、職員室など、落着いて遊ぶ場所がきまっている。その反面、Sには美しい色水への憧憬、繊細な感情がある。

ブランコに腹ばいになって揺らすのも、Sの世界の表現としての行為であろう。腹ばいになるとき、子どもの身体は大地に対して水平になる。安定した大地をみつめつつ自分が揺れるのをたしのむ。

Sはことばをはなさない。それだけに、心の中にあるイメージを、身体的行為や、手によって描く線によってあらわすほかない。保育によって、子どもが本来の世界を表現できるとき、子どもは満ち足りた、晴ればれた表情で一日を終る。そして、保育者が、こうして表現された子どもの世界に目をとめ、思いをめぐらすとき、次に子どもと出会うとき、互いに共通の理解を深められて親しさが増すように思う。

(愛育養護学校)